

要旨

プトリアナウリ, イエシカ。2014。阿部知二の小説『罪の日』における生人分比延の中にする作家の反映。ブラウイジャヤ大学、日本語学科。

指導教官：(I) エカマルタンチ、(II) エフリザル

キーワード： 反映、表現、履歴、性格

文学はフィクションや想像だけではなく、現実からも生まれられる。事件は現実にすばらしい文学で、大切と貴重になれる。研究者は『罪の日』の作家の現実の生活に阿部知二によって本研究を作った。文学作品中に現実がある者のに、別の事で人も投影である。現実と物語である。本研究の題は阿部知二の小説『罪の日』における生人分比延の中にする作家の反映。

生人分への作家の反映について、本研究では表現からアプローチした。人が二次的な資料として研究されるので、その投影が明確で整列である。阿部知二は自分を小説の人に投影する作家である。そのように、阿部知二は大切な対象になれる。

本研究の結果として『罪の日』の作家が阿部知二は、たしかに比延に自分が投影した。加えて、阿部知二は小説の中にインドネシアには自分の体験を伝えられる。私小説からのアプローチもあるので、フィクションの人が比延を明確にする。同じ履歴、場所、性格としても重要な資料で、阿部知二と比延は同じ人である。

次の研究への提案として、ほかの小説に阿部知二の反映について研究できる。たとえば、小説『アラマンガ』に阿部知二の投影について研究することだと思ふ。